

牛ウイルス性下痢の予防と清浄化対策

一般社団法人岡山県畜産協会

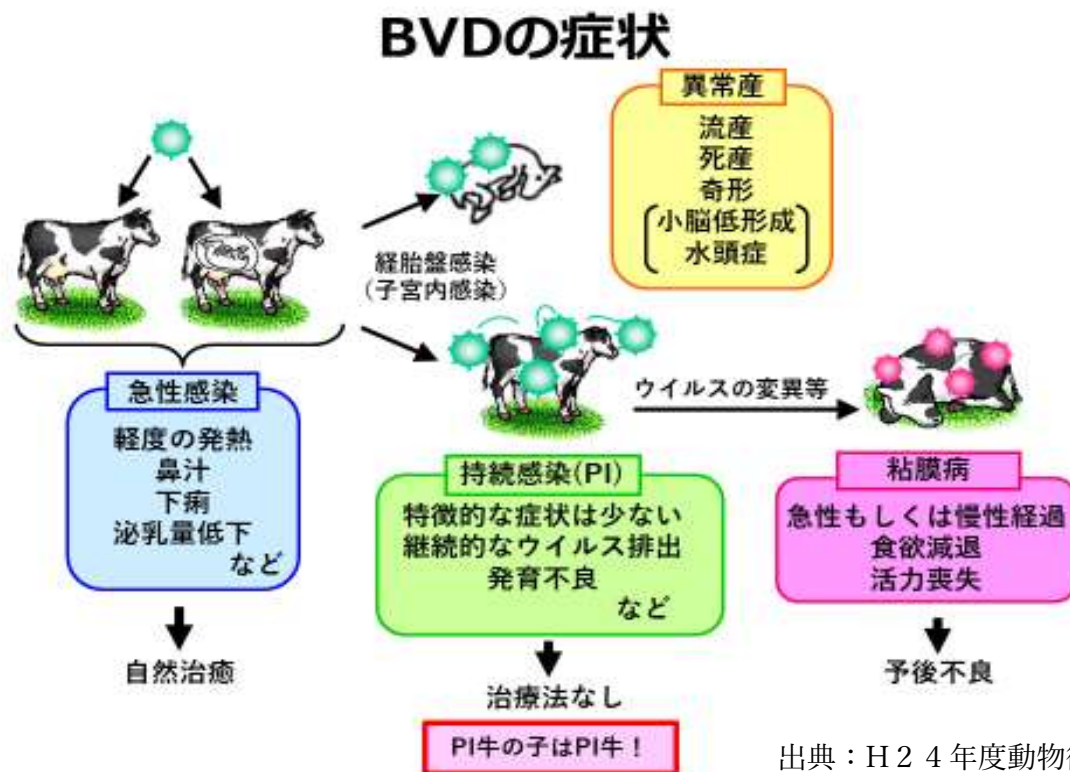
牛ウイルス性下痢（BVD）とは？

牛ウイルス性下痢は、牛ウイルス性下痢ウイルス（BVDV）の感染により、牛等に発熱の他、鼻汁や軽度の下痢・呼吸器症状を引き起こしますが、正常な牛では2～3週間で回復し、十分な抗体が産生されて終生免疫を獲得するとされています。しかし、妊娠した雌牛が感染した場合、母牛から胎子へも感染し、妊娠ステージにより、異常産（流産・死産・先天性異常等）を引き起こすほか、出生した牛はP I牛（ウイルスを終生体内に保持し、体外に排出する牛）となり農場内の主な感染源となります。

農場にP I牛が存在するとBVDVを拡散させ、牛群の免疫力及び生産性が低下するとされています。

福岡県の両筑家畜保健衛生所では、1酪農場でP I牛が牛群に与えた影響と農家の損失について調査・検討し、P I牛の影響は、乳量を減少させる、人工授精回数、空胎日数及び分娩間隔を増加させる、異常産、死産を増加させると多岐にわたっていると報告しています。

報告は乳用牛に関するものですが、肉用牛でも同様の損失があると考えられます。



出典：H24年度動物衛生研究所の疫学講習会資料

P I牛の発生状況は？

岡山県でも平成30年度から、乳用牛のBVD検査を開始し、初年度には13頭が摘発され、その内の9頭は県外導入牛及びその産子でした。令和元年度から令和3年度には18頭が摘発され、内訳は県外導入牛の産子16頭、乳用牛の成牛1頭とこの牛から受精卵移植で生まれた和牛子牛1頭でした。

清浄化に向けた対策は？

本病には治療法が無いので、最も効果的な対策は牛群内のP I 牛を摘発し、その全頭淘汰を実施することです。さらに導入牛やその産子の検査も重要です。

また、予防対策としてはワクチンが重要です。ウイルスには1型と2型があり、岡山県ではいずれの型も確認されています。このため、農場内の流行を未然に防ぐためには、2つの型を含む多価ワクチンによる牛群内全頭を対象とした予防接種を行い、免疫を付与することが重要です。ワクチン接種によってウイルスの急性感染を防ぐことにより、細菌やマイコプラズマ等の2次感染による、いわゆる牛呼吸器病候群の症状軽減も期待できるので、6種混合ワクチンの使用が推奨されます。

確実なワクチンの効果を得るためには、適切な時期に適切なワクチンを確実に接種することが必要です。現場担当獣医師や家畜保健衛生所の獣医師等と相談の上、実施してください。

BVD ウイルスの感染防御に有効なワクチン

含有ウイルスの種類		ワクチンの種類		牛5種混合		牛6種混合	
		生	不活化	生	生+不活化		
BVD	1型	○	▲	○	▲		
	2型		▲	○	▲		
牛伝染性鼻気管炎		○	▲	○	○		
牛パラインフルエンザ		○	▲	○	○		
牛RSウイルス感染症		○	▲	○	○		
牛アデノウイルス感染症		○		○	○		

○：生ウイルスを使用・・・1回接種で効果があり、比較的長期間効果が持続する。

▲：不活化ウイルスを使用・・・十分な効果を得るには2回接種が必要。

【注意事項】

牛6種混合生ワクチン

※ 妊娠牛に接種すると流産やP I 牛が生まれてくることがあるので、分娩後1週間以上、接種から種付けまでの間隔が必ず3週間以上とれる牛にのみ接種してください。

牛6種混合生+不活化ワクチン

※ 妊娠牛にも接種できるが、約1ヵ月間隔で2回接種が必要。

支援対策は？

(一社)岡山県畜産協会では、摘発されたP I 牛を廃用する場合に、評価額の8割を助成金として農家の皆様に交付しています。【(県:評価額の2/15 畜産協会:評価額の2/3)】

畜種や月齢で価格は変動しますが、**現在のところ最高で76万円**です。

種がつかない、流死産が続くなどがあれば、最寄の家畜保健衛生所へご相談下さい！

農場内でのP I 牛による被害を防ぐため、検査を受けてみませんか。